

第II部

研究と考察

第1章：ドーラ頌 —— 『デイヴィッド・コパーフィールド』論

1.

作品『デイヴィッド・コパーフィールド』(*David Copperfield*, 1850)において、ディケンズ(Charles Dickens)は、恋愛、結婚、家庭生活というものを、明らかに教訓的な光に照らしながら描き出している。すなわち、判断力を欠いた愛情、分別や良識を伴わぬ一時の情熱というものは、人間関係を破局と悲劇にしか導かぬ、という教訓である。アンガス・ウィルソン(Angus Wilson)の言葉を借りて言うならば、「ロマンティックな恋愛……、あばたもえくぼに見えてしまうような恋愛は、結局不幸と後悔のもとになる」¹⁾というところであろうか。

作品中には、作者のこの教訓を裏書きするような人間関係の例が次から次へと登場してくる。中でも読者の目を強くひきつけるのが、やはり主人公デイヴィッド(David)と彼にからむ二人の女性、ドーラ(Dora)とアグネス(Agnes)との関係である。デイヴィッドの愛を二分するこの女性二人については、これまでもさまざまに論議が戦わされてきた。しかし読者の素朴な関心は専ら、どちらがデイヴィッドにとっての理想の女性であったか、という点に集中していたようである。

作者の意図については、しかし曖昧なものは何もなかった。ドーラとの結婚は、あくまでも若かりしデイヴィッドの青春の過ちにすぎない。二人の結婚生活の中で、デイヴィッドが「何か大事な物を失った、何か大事な物が足りないという不幸な感じ」²⁾(Ch. XLIV)を幾度となく抱く時、我々は作者

の意図が奈辺にあるかをたやすく覚ることができる。すなわちドーラがデイヴィッドにもたらしたこの喪失感を埋めてくれる女性こそが理想の伴侶なのであり、そしてそれがアグネスなのである。

まずドーラ、そして最後にアグネスという物語の運びはあまりにも歴然としている。それゆえ我々はディケンズがこの二人の女性達の間ではっきりした価値判断を下していると考えざるを得ない。ドーラとの結婚が失敗の典型的例であるとすれば、アグネスとのそれは理想の実現である。ドーラがデイヴィッドの未熟さを象徴するような存在であったなら、アグネスこそはデイヴィッドの成長と円熟を象徴する存在に他ならぬ。デイヴィッドの愛の遍歴において作品の指し示す構図はきわめてはっきりしており、それは以下の川本静子の言葉に的確に要約されている。

…エムリー〔Emily〕への幼い愛もドーラへのおとぎの世界のような愛も、アグネスへの真実の愛に至る布石であった。前述した如く、ドーラを愛するデイヴィッドとアグネスを愛する彼は同一人物ではない。後者は前者を経て導き出されたものである。愛は主人公のビルドゥングを完遂させる大きな試練の一つなのである³⁾。

ディケンズの意図したところは、正しく川本静子の要約した通りであろう。とすればこの作品におけるドーラの存在は、いわばデイヴィッドがアグネスという理想の伴侶に行き着くための踏み台としての意義しか持たないのだろうか。また、デイヴィッドとドーラの結婚生活は、思慮を欠いた衝動的な愛に基づく男女の結びつきに対してディケンズが鳴らす警鐘以外の何ものでもないのだろうか。

先ほども述べたように、ディケンズ自身の意図は作品に明らかである。ディケンズは自身の述べたい事柄について韜晦に逃げるようなことのおよそ

ない作家だった。しかし文学作品は必ずしも作者の意のままになるものではない。そこには作者自身も自覚しなかった魂の奥底の声がはからずもこぼれ出してくるものである。あるいはまた、作品がそれ自体独自の生命を持って作者の意図した構図を裏切ることもあり得る。『デイヴィッド・コパーフィールド』についても、多くの読者はディケンズの意を素直に汲んでそのまま作品世界にひき込まれていったに違いないが、作者の意図するところに疑問を覚え、不満や不服を抱かざるを得なかった読者もまたいたはずである。とりわけドーラとアグネスの扱い方において、読者の反応はさまざまに分かれていったのではあるまいか。

2.

例えばディケンズの友人であり、良き理解者でもあったジョン・フォスター (John Forster) は次のように言っている。

… [デイヴィッドの] 愛情を、等しく分ちあう二人の女主人公のうちで、愛情に満ちた、可愛い幼な妻ドーラの、甘やかされた愚かさと優しさの方が、天使妻アグネスの、堅実でありすぎる叡知と、余りにも自己を犠牲にする優しさよりも、読者の心を引くものがある⁴⁾。

また、マイケル・スレイター (Michael Slater) はドーラというキャラクターを「ディケンズの中期の作品の中でも最も心に残る成功例の一つ」⁵⁾ であると述べ、逆にアグネスについては、「彼女を成功したキャラクターなどと主張する批評家がいたとしたら、全くもって大胆不敵」⁶⁾、と鼻であしらう。

さらに過激なのは G. K. チェスタートン (G. K. Chesterton) である。チェスタートンは、アグネスをデイヴィッドの理想の伴侶と定めたディケンズに対し、真っ向から異議を唱える。

ドーラとの結婚こそが真の結婚であり、アグネスとの結婚などは何と
いうことはない、中年男の妥協であり、次善を取ったにすぎず、御都
合結婚を高尚に昇華しただけのことだ、と読者は依然感じざるを得な
い⁷⁾。

アンガス・ウィルソンにしても、デイヴィッドとアグネスのめでたしの結
末には批判的だった。

彼〔ディケンズ〕はロマンティックな恋愛や、情熱の魔力をあざけり、
それに代わる主張を掲げた。しかしアグネスとの家庭団らんの満足感
では、空疎すぎてその埋め合わせにはなるまい⁸⁾。

おそらくは、優等生的存在が逆に人々の反感を買うという、現実にはしば
しばありがちな運命の皮肉が、アグネス自身を見舞ったのであろうし、また
ディケンズの心算をも裏切ったのであろう。しかし対比させられるところの
ドーラがやはり魅力に乏しいキャラクターであったとしたら、ここまでアグ
ネスが酷評されることもなかったように思われる。ドーラに何らかの意味で
心ひかれたからこそ、アグネスが合格品でドーラが失格品とでもいったよう
なディケンズのいささか機能的すぎる処理の仕方に不満を覚える読者が出て
きたのではあるまいか。正しくこの点を衝いているのが、次の宮崎孝一の指
摘である。

デイヴィッドとドーラとの生活は、たしかに、愚かで非能率的なもの
ではあったが、しかし、それなればこそ深い真実性を含んでおり、こ
れを「性格、目的の違い」などという言葉で批判するデイヴィッドは
(したがってディケンズは) せっかく自分で創造した美しいものに、

不必要なけちをつけているものとしか言いようがない。……ここで作者は、デイヴィッドの精神の成長を強調しようとするあまり、彼の心情のうるおいを無理に枯渇させてしまったように思われる⁹⁾。

宮崎孝一の指摘する通り、デイヴィッドとドーラの結びつきの奥底には、確かに何か「深い真実性」が潜み横たわっているように思われる。たとえに二人の結婚生活が、痛ましくも滑稽な失敗のエピソードの連続として描かれていようとも、である。デイヴィッドとドーラは、ただ若さゆえの軽はずみな衝動と情熱に駆られてのみ結ばれたわけではなかった。デイヴィッドはアグネスに行き着く前にどうしてもドーラを通過する必要があったのだ。確かにディケンズの意図する通り、デイヴィッド自身の成長のために。しかしそれは、ドーラの未熟さと無能ぶりを、醒めた観察者の眼で一段上に立った立場から批判することによってなされる成長ではない。あくまでも二人の結びつき、魂の交流そのものが、デイヴィッドにとっては深い意味を持っていたのだと筆者には思われる。それではその意味とは一体何なのか。デイヴィッドとドーラの愛は作品の中でどれだけの意義を持っているのだろうか。以上のことを、作品に即しながら探っていきたいと思う。

3.

まず最初に、ドーラとは一体どのような女性であるかを、改めて見ていきたい。ドーラにおいて最も著しい特徴は、その幼児性である。彼女の肉体的な美しさは幾度となく描写され、またデイヴィッドがそれに魅惑される場面も繰り返し出てくるけれども、そこには何ら官能的な味わいはなく、したがって二人の愛には少しも肉の匂いは含まれない。ドーラは、言うなれば一人前の成人した女ではないのである。そしてそのことは、ドーラの周辺の方の人物たちが、そして他ならぬドーラ自身が誰よりもよく承知している。

婚約期間中、デイヴィッドは、ドーラを周囲の人間たちがまるで「きれいな玩具か、遊び道具」(a pretty toy or plaything) (Ch. XLI) のように扱い、ペットの犬のようにかわいがることに困惑し、そんな扱いをやめてもらうようにドーラに忠告する。

「ねえ、だって、もう子供じゃないんだものねえ」私は、いささか不服そうに言った。

「ほら！ またむずかしいことおっしゃるのねえ！」

「むずかしいこと？」

「そうよ。みんな、ほんとに優しくして下さるんだもの。あたし、とても幸福なのよ」

「そりゃ、まあ、そうだろうけどねえ。幸福なのはいいけど、でも、もっと大人^{おとな}らしく扱ってもらってもいいんじゃないかな」

と、ドーラは、急にこわい顔になったかと思うと（それがまた可愛いのだが）、しくしく泣き出して、そんなにおいやなら、なぜあんなに婚約、婚約っておっしゃったの？ いやでたまらなきゃ、いますぐ往^いっておしまいになればいいのに、と言うのである。(Ch. XLI)

ドーラがこれほど過敏にデイヴィッドの言葉に反応したのは、彼が彼女自身の扱って立つべきアイデンティティである幼児性を非難したからである。そこを非難されてしまえば、彼女にとっては全存在を否定されたも同じで立つ瀬がなくなる。「玩具か、遊び道具」、あるいはペットの犬のように扱われることは彼女にとってごく自然な楽しいことであり、デイヴィッドの望むように一人前の大人として責任を持たされることこそ迷惑以外の何物でもなかったのである。それでもドーラは、デイヴィッドへの愛情ゆえに一応は努力して主婦のたしなみを身につけようとしてみる。

だが、料理の本には、頭痛がしてくるし、数字には、完全に泣かされたらしかった。寄せ算などでできやしないと言って、数字はみんな消してしまい、帳面いっぱい、小さな花束の絵や、私とジップ [Jip] の似顔などを描き散らしてしまった。(Ch. XLI)

このエピソードが何よりもよくドーラを象徴している。料理や計算、すなわち現実の雑事は彼女の世界にとってはまったく異質な理解不能の事柄でしかなく、花やペットの犬や愛する人の存在こそ彼女にとっての真実のものであったのである。そして確かにデイヴィッドは、そのようなドーラであればこそ強くひかれていたのではなかったか。ドーラの前に容赦ない現実を突き付けて彼女を泣かせたり脅えさせたりした後、デイヴィッドは必ず自己嫌悪に陥って悩む。そして自分自身を「まるで妖精ようせいの家に飛び込んだ、何か怪物」(Ch. XXXVII) のように感じる。しかしやはりデイヴィッドは現実に目を向けずにはいられないし、ドーラにもそれを強制せずにはおられない。そしてドーラについての真実をよりよく知る人々は、そんなデイヴィッドをやりわりたしなめる。

「今のあなたの話、あのドーラって人には駄目よ。ええ、駄目。あの女ひとつてのはね、ほんとに自然そのままの子供 (a favourite child of nature) なの。ただ朗らかで、明るくて、喜びだけに生きてる人間なの」(Ch. XXXVII)、とドーラの友人のミス・ミルズ (Miss Mills) は言う。そしてデイヴィッドも心の底ではそのことをよく承知していたはずだった。

すべての過ちは、デイヴィッドがドーラという現実世界とはまったく相容れない存在を、結婚という過酷な現実の中に巻き込んでしまったことにある。結果としてデイヴィッドは、かつてあれほど愛したドーラの浮世離れた幼さに手を焼くようになり、それを臆気ながら覚ったドーラは途方にくれるし

かなくなった。二人の間には確かに深い絆が結ばれていたが、それは結婚という形で実現されるべきものではなかったのである。死を目前にしてドーラはデイヴィッドに次のように言う：「もしあしたち、^{わらべ}童の恋だけで終わって、そのままお互い忘れてしまっていた方が、ずっとよかったのかもしいわねえ。奥さんになる資格なんかなかったんだって、そんな気がしてきたのよ」(Ch. LIII)。ドーラ自身も、二人の関係の奥底にある真の意味を覚っていたのである。

それではその真の意味とは何だろうか。現実世界では到底ふさわしい伴侶となり得なかった幼子のようなドーラが、なぜデイヴィッドのこれほど切実に求める対象となったのか。それは彼女という存在が、デイヴィッドからは不当にも奪われてしまったあの何の苦労も煩いもない至福の幼年時代の体現に他ならぬからである。親の愛に包まれ、一切の雑事から隔てられ、世の荒波にもまれることもなく、愛すべきわがままと無責任とを恣にできたあの時代、ドーラはその時代を永遠に生き続ける幼子であり、またその時代そのものでもある。彼女があればほど現実に接することを拒んだのも、ドーラを幼年時代の象徴的存在と考えれば納得がいく。現実というものから煩わされぬことこそが、幼年時代の特権である。幼年時代という聖域を侵す現実、それはすなわち、病気や事故、親の離婚や死、といった世にも恐ろしい過酷な「怪物」のような形をとって襲ってくるものではあるまいか。そしてデイヴィッド自身の幸せな幼年時代を奪ったのも、マードストーン (Murdstone) 姉弟という正に「怪物」そのものの現実だったのである。

至福の幼少年時代を奪われた者は、その心の空虚を一生涯抱え続けていくものである。あまつさえ、デイヴィッドがなめた幼少年時代の苦悩は並大抵のものではなかった。デイヴィッドの中には、ついに充たされずに過ぎ去った己が幼少年時代への絶えざる飢えがあったに違いない。彼があればほどドーラのあどけなさ、苦労知らずのお嬢さんぶりにひきつけられたのも、もし運

命の皮肉が彼からもぎとっていかなかったら彼自身が享受していたはずの正にその至福の幼少年期の幻が、ドーラの人となりのすみずみに充ちあふれていたからである。

ドーラは、もしも叶えられたならかくあらまほしかったであろうデイヴィッドの、今一人の自己である。彼女を愛し、そのわがままを聞いてやり、辛い世間の風の当たらぬように守ってやるのが、デイヴィッドにとってはとりもなおさず、再び幼年時代に立ち戻った自分自身を慰撫し、抱擁することに他ならなかったのである。またデイヴィッドの中には、至福の幼少年期のままで留まっていたという欲望が昔から人一倍強くあった。エミリー（エムリー）との幼い恋が語られる時に、デイヴィッドのその心の一端がちらりと顔をのぞかせる。

このまま年もとらず、なまじの知恵もつかず、いつまでも子供のままで、手に手を取って、明るい日光の中や、花咲く牧場を、さまよい歩くことが、もしできたら！……現実の世界は、全く入り込んでこない、ただ私たちの純真な光に照らされて、いわばあの遠い星屑のように漠然とした、そうした夢だけが、^{みちみち}途々ずっと私の心をいっぱいにしていた。(Ch. X)

デイヴィッドのこの幼い夢は、マードストーンによってすぐさまもぎとられてしまう。しかし世の荒波にほうり出された後も、この夢はデイヴィッドの魂の中にずっと息づき続けていたに違いない。そして彼のその純真な魂が、ドーラの無垢な魂とひびき合うのである。ドーラもまた、ただ受動的に愛されることだけを望んでいたわけではなかった。

新婚当初、夜遅くまで書きものの仕事をしているデイヴィッドを、傍らに静かに座って、ただひたすらドーラは見つめている。先に寝なさいと言われ

ると、彼女は泣きながら、こうしているだけで幸福なのだから、どうしても傍に居させてくれと頼む。そのうち彼女は、夫が仕事をしている間、夫が使っているのと同じペンを持たせてくれとせがむ。

いいと私が言ってやったとき、そのいじらしい喜び方といたら、いま思い出してみても、涙が出る。その次、いや、それからもずっとそうだったが、私が書きものを始めると、彼女はいつもの場所に坐って、じっと予備のペンをそばへ置いているのだ。こうして私の仕事に加わることを、どんなに彼女が得意げにしたことか！そして、私が新しいペンを要求するたびに——私もまた、わざとたびたび取換えるのだった——どんなに彼女が喜んだか！それを見ると、私もまた、このベビー奥さんを喜ばせる新しい途^{みち}が、おのずからにして浮かんでくるのだった。(Ch. XLIV)

ドーラが望んでいるのは明らかにデイヴィッドと同化することである。夫を知的に理解するのではなく、身体ごと夫の魂の中に溶け込んでいこうとする意気込みが、彼女のこの姿には感じられる。彼女は、デイヴィッド自身の魂の分身に他ならないのだ。そしてそのドーラを受け入れることによって、デイヴィッドが自らの奥深いところに受けた幼年時代の傷が癒されていったのだ。

ドーラとの結婚生活は、現実的な見地から考えれば確かに人生の停滞期であったかもしれない。現実生活の中で、心身両面からデイヴィッドを支え、育み、導いていくのは、疑いなくアグネスのような伴侶であろう。しかしドーラと過ごした停滞期の中に、デイヴィッドの魂が癒される至福の瞬間があったのであり、それゆえにこそドーラとの愛はデイヴィッドにとって何にも換え難く貴重だったのである。

注

- 1) Angus Wilson, *The World of Charles Dickens* (London: Martin Secker & Warburg, 1970)、松村昌家訳『ディケンズの世界』（英宝社、1979）、p. 192.
- 2) 以下『デイヴィッド・コパーフィールド』の引用文の訳は、すべて中野好夫訳（新潮文庫）に拠る。Text は *The Oxford Illustrated Dickens* (London: Oxford U.P., 1974) 版に拠る。引用の後の括弧内に章数を記した。
- 3) 川本静子『イギリス教養小説の系譜』（研究社、1973）、p. 66.
- 4) John Forster, *The Life of Charles Dickens* (1872-4; London: J. M. Dent & Sons, 1969), Vol. II, 宮崎孝一監訳、間二郎・中西敏一共訳『定本チャールズ・ディケンズの生涯・下巻』（研究社、1987）、p. 105.
- 5) Michael Slater, *Dickens and Women* (London: J. M. Dent & Sons, 1983), p. 250.
- 6) *Loc. cit.*
- 7) G. K. Chesterton, *Appreciations and Criticisms of the Works of Charles Dickens* (New York: Haskell House, 1970; first published 1911), p. 133.
- 8) Angus Wilson, 松村昌家（訳）、*op. cit.*, p. 194.
- 9) 宮崎孝一『イギリス小説論考』（開拓社、1971）、pp. 121-122.

第2章：増幅する自我 —— 『デイヴィッド・コパーフィールド』論

1.

『デイヴィッド・コパーフィールド』 (*David Copperfield*, 1850) は、いわゆる教養小説（ビルドゥングスroman）として読むべきか否か。

自伝小説の色彩を濃厚に帯びたこの作品には、教養小説に必要な道具立てがすべて揃っている。主人公の幼少年時代の逆境、そこからの苦闘、女性遍歴、主人公を或いは苦しめ、或いは助ける多彩な登場人物たち、そして遂に勝ち得る成功と幸福。物語をこのように辿っていけば、この作品は、主人公デイヴィッド（David）の成長と発展の記録と言ってもさしつかえあるまい。

この作品を教養小説ではないとする人々は、その立論の根拠として以下のような点を挙げてくる。まず一つは、物語の焦点が主人公以外の登場人物に分散しすぎているという点だ。例えば青木雄造はこの作品について、「むしろ、内面的な魂の発展よりも外部的な事件の継起に、主人公自身によりも彼をめぐる人々の身の上に、より多くの関心とスペースとが向けられている。その意味ではドイツ流の教養小説（Bildungsroman）というよりも、悪漢小説的¹⁾、と指摘する。

さらには、作品のもっと本質的な、言い換えれば致命的な部分を衝く反論もある。即ち、デイヴィッド自身が果たして成長発展していく主人公かどうか、という疑問である。これについてはジョージ・オーウェル（George Orwell）が、デイヴィッドのみならずディケンズ（Charles Dickens）の全登場人物についてきっぱりと否定的な意見を唱えているので、引用してみよ

う。

トルストイ〔Tolstoi〕のほうがわれわれ自身についてはるかに多くのことを語ってくれるような気がするのはなぜか？ それは彼のほうがディケンズより才能があるからでも、いや結局ゆたかな知性に恵まれているからでもない。トルストイの登場人物たちは成長するからなのである。彼らは自己の魂の形成に悪戦苦闘する。ところがディケンズの人物たちは初めから出来あがった完成品なのだ。……要は、ディケンズの登場人物には精神生活がないということだ²⁾。

オーウェルの決めつけに対し、いささか割り切りすぎだと反発しつつも私たちが必ずしも否定しきれないのは、確かにデイヴィッドが教養小説の主人公としていかにも食い足りない人物のように思われてならないからだ。事実、サマセット・モーム（W. Somerset Maugham）はデイヴィッドを、「この作品の中で最後まで一番興味の持てない人物」³⁾、と軽く一蹴している。モームをはじめ、多くのディケンズ読者の目は、デイヴィッド自身より魅力溢れる個性的な脇役たちの方へ、より強く惹きつけられるらしい。

私たちがデイヴィッドに感じるこのようなもどかしさや不満の原因を、海老池俊治は次のように分析している。

……〔デイヴィッドは〕冷静な反省によって幻滅を追究しようとはしない。彼が危機に見舞われると、例えばペゴティー〔Peggotty〕一家の破滅に際して、身を挺してその援助に乗り出すか、或いは、冷酷に見逃すか、また、“child-wife”を一人前の大人にするか、それとも自分も彼女と一緒に破滅するか、という決定を迫られると、デイヴィッド（作者）は、突然、身をひるがえして、物語の語手になって

しまう。全知で、非人情な「語手」という機能が介入して、デイヴィッドは人間性を喪失してしまうのである⁴⁾。

海老池俊治の言う通り、読者がデイヴィッドに最も苛立ちを覚えるのは、人生の重大な局面に臨んだ時の彼の無能さ、そしてそのことについての自覚の欠如である。危機は常に運命の幸せな偶然によって回避される。このご都合主義的展開を指して、この作品が教養小説というより悪漢小説（ピカレスク・ノヴェル）の典型であり、主人公の精神的成長など無きに等しい、と断ずる読者がいても不思議はなからう。

では、デイヴィッドとは、それほど語るに足らぬ人物なのだろうか。読者はただ、彼の目を通して語られる華麗な副人物たちの言動にのみ打ち興じていればよいのだろうか。上述のさまざまな批判を念頭に置きながら、今一度デイヴィッドという人物像をみつめ直していきたいと思う。

2.

デイヴィッドは、一言で言うならば、人生の優等生である。純真で疑いを知らず、容姿頭脳共に恵まれ、着実勤勉に努力して人生の表街道を歩いていく。その優等生ぶりは、本文第42章の冒頭で彼自身の口から余す所なく語られる。正に時代を超えてすべての若者がお手本とすべき完璧な人生の指針である。しかし、デイヴィッド本人が一点のためらいも疑念も抱かずこの指針通り人生に立ち向かっていく姿を見ていると、おそらく読者は幾分興奮めするのではあるまいか。あれほど微に入り細をうがって描かれたデイヴィッドの幼少年時代の苦悩は、彼の存在のどこにその陰を落としているのであろう。過去の苦しみは彼の中に何一つ歪みも卑屈さも生じさせなかったのだろうか。

私たちがデイヴィッドに対して抱く不満は、すべてこの点に起因している。

彼という人物の人となりには、あまりにも陰の部分が無さすぎるのである。彼は人間の醜悪な属性を何一つ帯びていない。無知と未熟さが時として彼を過ちに導くことはあっても、そこには彼自身の中に潜在するかもしれぬ悪しき性質が何一つ反映していないのである。

作品中にただ二つ、それをつきつめていけば遂にはデイヴィッド自身の醜悪さに触れずにはすまなくなる局面がある。一つはデイヴィッドとステアフォース（Steerforth）の関係、もう一つはドーラ（Dora）との結婚生活の顛末である。

前者に関して言えば、デイヴィッドのステアフォースに対する無条件の崇拜が、結果としてエミリー（Emily）を破滅に導き、ペゴティー家を悲惨な運命に追いやることになるのだが、デイヴィッドはこのことにおける己れの責任を追求する気もなく、またステアフォースに対する自分の不信と幻滅をあからさまに語ることで過去の友情を醜悪なものにすることから無意識の内に逃がっている。そしてディケンズは、最終的に、嵐の海におけるステアフォースの死という唐突な形で二人の関係をうやむやのうちに終わらせてしまう。

また、ドーラとの結婚生活に関しても同じようなことが言える。二人の結婚生活が、その心情面はともかく現実的なレベルで事実上破綻を来しかけていた時、デイヴィッドの心の中にはただならぬ葛藤が生じていたはずである。しかしここでもディケンズは、ドーラの死という形で、收拾がつかなくなってきた事態にあっさりとけりをつけてしまう。

以上のように見ていくと、やはりディケンズはデイヴィッドという主人公に何一つ歪みも陰りも醜さも付与したくはなかったのだ、という結論に達せざるを得なくなる。ディケンズにとってデイヴィッドは、あくまでもかわいい優等生であり、綺麗事の世界の住人のままでよかったのである。事実、デイヴィッドがその綺麗事の殻を打ち破って、醜く愚かしいあからさまの人間

の本性を我々の前に曝してくれることはついぞない。

小説を読むという行為が何を意味するかはさておき、二十一世紀に生きている私たちが100年以上前のこの作品を読んでいるということを考えてみよう。何の先入見もなくただこの一篇だけを読むとして、やはり私たちは何と云っても主人公デイヴィッドの生き方、その人生行路を、固唾をのんで見ずらぬにはおれない。そして私たちと同じように、彼が善と悪、清と濁、陽と陰という両極の狭間で揺れ動く複雑な自我を有していることを期待するだろう。この期待から照らしてみれば、確かにデイヴィッドは私たちにとって、いかにももどかしく物足りない主人公であるというほかはない。また私たちが多少の予備知識を持っており、この作品がいわゆる教養小説の骨格を備えていることに誘導されて読み進んでいった場合、その不満は一層決定的なものとなる。

では、遂に私たちはこの作品を通してデイヴィッドの複雑な自我に、或いはその魂の内奥に全く触れることができなかつたのだろうか。たとえデイヴィッドが直接語らずとも、何らかの方法でそれは私たちの心に伝わってはこなかったのか。デイヴィッドただ一人をみつめ、その言動を追うだけでは、確かに私たちはより深いデイヴィッドを知り得る術はない。しかし、彼を取り囲む他の登場人物たちに目をとめ、彼らとの関係においてデイヴィッドを改めて見直してみる時、私たちはそこにデイヴィッドの新たな姿を見出すことができるのではあるまいか。

3.

例えばユライア・ヒープ (Uriah Heep) を見てみよう。彼は社会の中でもまれてすっかり心の歪みきった男である。その卑屈と偽善は読者の嫌悪の情をかき立てずにはおかないけれども、それよりもっと印象的なのは、デイヴィッドのヒープに対するあまりにも激烈な反発の感情である。デイヴィッ

ドはあたかもヒープの存在それ自体が耐えられないかのように彼を忌み嫌う。しかし考えてみると、ヒープはデイヴィッドと多くの点で共通項を持った人物である。共に貧の中から身を起し、独力で社会的地位を獲得してゆき、そして身分が上の令嬢に恋をする。だが、その過程においてあらゆる俗世の垢や穢れに染まっていったヒープに比べ、デイヴィッド自身はいつまでも清浄無垢なままだ。そこで私たちは、ヒープは歪んだ鏡に映ったデイヴィッド自身のグロテスクな虚像かもしれぬ、ということに思い至るのである。ディケンズ自身にその意図があったかどうかはともかく、デイヴィッドの悪の可能性というものを私たちはヒープの中に見出すことができるのではあるまいか。

またステアフォースに対するデイヴィッドの無条件の崇拜の中にも、私たちはデイヴィッド自身の魂の隠された歪みやひずみを見出すことはできないだろうか。すなわち、「マードストーン＝グリーンビー商会」(Murdstone and Grindby's) で働いていた自分を恥じ、ユライア・ヒープの卑しさを軽蔑し、ステアフォースがエミリーを破滅させたことをついぞ責めなかったデイヴィッドの姿に、私たちはスノビズムの濃厚な気配を嗅ぎとることができるのである。

ヒープとステアフォースがデイヴィッドの描かれざる陰の部分を映し出す存在であったとすれば、ドーラとの関わりもまたデイヴィッドの別の一面を映し出していると考えられて来る。アンガス・ウィルソン (Angus Wilson) も言う通り⁵⁾、デイヴィッドとドーラの結婚生活の破綻は、軽はずみで衝動的な男女の結びつきに対してディケンズが打ち鳴らす警鐘である、ととるのが一般的な考え方であろう。しかし二人の関係の中には、作者の教訓的な意図を超えた何かが潜んでいる。女としての魅力より幼児性の方が繰り返しが繰り返され強調されるドーラは、いわば、あの何の憂いも煩いもない至福の子供時代というものを永遠に象徴する存在なのではないだろうか。そして

運命の手によって幼少年時代の幸福を不当にももぎとられたデイヴィッドは、まるでその過去の埋め合わせをしようとするかのように、やみくもに彼女に焦られるのである。ドーラへのデイヴィッドの溺愛の中には、彼自身の過去に受けた魂の傷が投影されているのだと言っても決して見当はずれではないように思う⁶⁾。

ドーラをあまりにもあっけなく死なせてこの1篇から退場させてしまうディケンズの小説作法に対する不満と相まって、ドーラの後を継いで理想的な妻としての任務を全うするアグネス (Agnes) の性格創造についても、大方の読者の評価は大変厳しい⁷⁾。彼女のあまりに完璧な性格設定は、彼女とデイヴィッドが結ばれる物語の結末を、いかにもご都合主義的な、リアリティを欠いたものに見せてしまうようである。愛するデイヴィッドを横あいからドーラに奪われながら、デイヴィッドに対してはもちろん、私たち読者に対しても何一つ不満らしい気配をみせず、ひたすら二人の結婚生活を祝福し見守る彼女の姿は、近代小説の読者にとってはむしろ胡散臭いものに映るのだ。

しかしながらこのアグネス像も、デイヴィッドとの関係において見直してみるとまた違った様相を帯びてくる。彼女はデイヴィッドにとっての「守護天使」(my good Angel) (366、367、515頁)⁸⁾の化身というよりも、彼との関わりにおいていや応なしに「守護天使」にならざるを得なかった一人の女であったのだと考えるわけにはいかないか。並みはずれて純真なデイヴィッドやドーラ、或いは善良すぎて頼りにならない父親のウィックフィールド氏 (Mr. Wickfield) などに対して、純粋であると共に成熟した心を持つアグネスは、自己の本心を深く包み隠して保護者的立場をとらざるを得なかったのである。そしてそのような自分の有り様を決して損な役まわりと思わず、けなげにふるまい、生き抜いていく彼女のような人物は、現実世界においても必ずしも稀有な存在ではないと言えよう。

一方にドーラ、他方にアグネスという女性を配することによって、デイヴィッドの人間的な成長の図式ははじめて私たち読者にも感得される。焦点をデイヴィッド一人に限定した場合には到底窺い知ることのできなかった彼の魂の諸相が、さまざまな副人物たちとの相関関係の中において浮かび上がってくるのである。その意味でこの作品は、いささか変則的な形ではあるけれども、やはり教養小説的な内面世界の広がりをものぞかせていると言えよう。

ところでこの作品の中には、主人公デイヴィッドと共に作品の教養小説的骨格を形成している人物群とは別に、その全く枠外できわめて特異な光を放っている登場人物がいる。ミコーバー (Micawber) がそれである。彼の魅力と存在感の大きさは、デイヴィッドを中心とする教養小説的枠組みを、時には揺るがしかねぬほどのものである。しかしこういう型破りの名脇役がいてこそ、この作品はさらにその幅と奥行きを拡げているのであり、ディケンズの文学世界の醍醐味を味わわせてくれるのである。厳密な意味での教養小説の枠を超えて、より広く、より深い意味での型破りの教養小説と呼んでもさしつかえはないだろう。

注

- 1) 小池滋・高松雄一・野島秀勝・前川祐一 (編) 『青木雄造著作集』 (南雲堂、1986)、p. 86.
- 2) ジョージ・オーウェル、小野寺健 (編訳) 『オーウェル評論集』 (岩波書店、1982)、pp. 136-7.
- 3) ウィリアム・サマセット・モーム、西川正身 (訳) 『世界の十大小説 (上)』 (岩波書店、1958)、p. 307.
- 4) 海老池俊治 『ディケンズ』 (研究社、1955)、pp. 99-100.
- 5) Angus Wilson, *The World of Charles Dickens* (London: Martin

Secker & Warburg, 1970)、松村昌家訳『ディケンズの世界』（英宝社、1979）、p. 192.

6) Cf. 拙論「ドーラ頌——『デイヴィッド・コパーフィールド』論」（内多毅監修・杉本龍太郎・内田能嗣編『イギリス文学評論Ⅳ』創元社、1992）、pp. 118-127.

7) Cf. ジョージ・オーウェル、小野寺健（編訳）、*op. cit.*, p. 141. あるいは G. K. Chesterton, *Appreciations and Criticisms of the Works of Charles Dickens* (New York: Haskell House, 1970; first published 1911), p. 133.

8) Text は The Oxford Illustrated Dickens (London: Oxford U. P., 1974) 版に拠る。

